

IV-54

明治期の鉱業都市におけるまちづくりについて

—— 秋田県小坂町を例として ——

秋田大学 学生員 ○畠山 智憲

秋田大学 正 員 清水浩志郎

秋田大学 正 員 木村 一裕

1. はじめに

小坂町は秋田県の北東端に位置し、北は青森県と、東は岩手県と隣接する人口7,732人（平成6年現在）の町である。同町は県下最大の鉱山町として栄えてきた歴史を持っており、鉱山開発が盛んに行われた明治・大正期には現在の3倍以上の人が居住する地域であった。この鉱山開発により、突如山間僻地の小坂村（現小坂町）に鉱山都市が現出することとなったが、同村におけるまちづくりは「鉱山」主導のもとに行われ、同村には様々な社会基盤が整備された。本研究はこの「鉱山」によるまちづくりについてその実態や背景を明らかにすることを目的としている。

2. 「鉱山」主導のまちづくり

「鉱業」は多くの場合、山間僻地で開発が行われ、場合によっては相当長い期間に渡って続けられるため、そこには社会生活に必要な様々な都市機能がそなわっていないてはならない。

東北の一寒村であった小坂村では、鉱山の発展とともに一民間企業である「藤田組小坂鉱山（現同和鉱業（株））」によって学校、住宅、上水道、電気、鉄道、病院、劇場等、明治当時において大変珍しかった最先端の社会基盤が整備された。当時の鉱山幹部の一人で第三代小坂鉱山所長久原房之助は、この

ような小坂村のまちづくりについて「社会政策の見本となるような近代的な社会資本整備を山間僻地の小坂村で行い、これを世の中に広めていこうと考えていた」と後に語っている。このような鉱山幹部のまちづくりの構想は空想におわることなく実践に移され、小坂村には「鉱山」の手によって次々と社会基盤が整備されていった。

3. 鉱山開発と小坂村

(1) 鉱山開発

小坂鉱山は1886（文久元）年、地元の農民によって発見され、以後幾度か経営母体を変え、1884（明治17）年大阪に本店を置く商社藤田組の経営となった。発見当初から積極的に開発が行われたが、藤田組の経営となってからは銀・銅生産量ともに日本一を記録するなど大発展を遂げた。

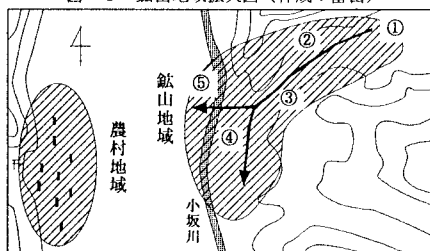
(2) 小坂村の変容

鉱山発見以前の小坂村は、自給自足に近い農村社会で、わずかに西部の出羽神社周辺に小集落が存在していた。しかし、鉱山が現在の元山付近で発見されるに及んで、従来の「農村地域」とは別の「鉱山地域」が誕生した。この鉱山地域は明治維新を経て、鉱山開発が進捗するとともに、商業集落の誕生を見ながら図-1に示すように①、②、③、④、⑤へと拡大し「鉱山町」を形成した。これにより、小坂村には従来からの「農村地域」と新興の「鉱山地域」の二つが併存することとなった。

表-1 小坂村・小坂鉱山関係年表（作成：畠山）

年	事項
1884(M17)	藤田組払い下げ
1891(M24)	小坂尋常高等小学校移転新築（鉱山寄付）
1893(M26)	小坂鉱山消防隊発足
1896(M29)	鉱山用水工事完成
1897(M30)	鉱子第一発電所完成、鉱山に電灯つく
1900(M33)	「自溶製錬法」に成功
1905(M38)	上水道完成（24,000に供給可能）
	鉱水除外設備完成
1906(M39)	小坂元山尋常小学校設立（鉱山寄付）
1908(M41)	小坂鉄道開通
	私立小坂鉱山病院開設
	世界初の大規模露天掘り採鉱開始
1910(M43)	劇場「康楽館」完成

図-1 鉱山地域拡大図（作成：畠山）



表－２ 鉾山によるまちづくり詳細（作成：畠山）

項 目	年	概 要
厚生施設	住 宅	1884(M17)～ 「鉾業」においてはその生産方式の制約から、また鉾夫の多くが出稼ぎまたは他地方からの移住者であるため、事業を進めるためにはそこに働く従業員の住居を企業側が提供する必要が生じる。小坂においてもこれらの社宅は市街地の周辺に計画的に建設された。
	上水道	1905(M38) 当時の人口（10,023人）を大きく上まわる給水人口24,000人分の上水道が敷設された。同年の全国の水道普及率が3.6％という状況の中で、この小坂水道は東北初の近代水道であった。
	教 育	1891(M24)～ 鉾山による設計、建設費、運営費の全額出資により電気、上水道施設を備えた二つの小学校が建設された。
	医 療	1908(M41) 敷地10,054㎡、延べ床面積3,402㎡の私立小坂鉾山病院は、診療7科を持つ看護婦養成所を併設した秋田県唯一の総合病院で、当時の県内医療の指導的立場であった。
	劇 場	1910(M43) 鉾山関係者の福利厚生を目的として建設された劇場「康楽館」は、建坪340坪、定員800人、外観が明治洋風建築、内部が伝統的芝居小屋風の和洋折衷の大変珍しい建造物で、主に歌舞伎公演が催されたがその他にも学校の催し物や村の集会等地域住民に幅広く利用された。
鉾山事業	電 力	1897(M30) 足尾鉾山(1891)に次ぐ、我が国２番目の水力発電所で発電された電力は、鉾山施設以外に社宅、街路燈用としても利用され小坂の町を明るく照らした。この時代「電燈」は文明開化の象徴的存在であった。
	鉄 道	1908(M41) 小坂一大館間全長22kmのこの鉄道は、鉾山私鉄道でありながら一般の旅客運送にも供され、1910(M43)年には旅客106,000人、貨物180,000tを輸送した。
その他	警 察	1878(M11) 「請願巡査（特定の人が特定の目的のためにその費用を負担して巡査の配置を求めることができる制度）」により鉾山には数名の巡査が配置されていたが、これとは別に1903(M36)年には巡査部長派出所が鉾山地域に設置された。
	郵便局	1890(M23) 1884(M17)年に農村地域へ設置されたが1889(M22)年廃局され、翌年鉾山地域へ「小坂鉾山郵便局」として新築移転された。
	寄 付	断続的 鉾山は多額の寄付を同村に行い財政面での支援をしたが、これは同村だけではなく周辺町村にも行われていた。当時の資料によると同村の財政、社会資本整備のほとんど全てが鉾山頼みであることが分かる

4. まちづくり

鉾山によって行われたまちづくりは、形式的にはそのほとんどを「厚生施設の建設」「鉾山事業の地域への提供行為」と位置づけることができる。

鉾山開発が盛んになった明治期には、表－２に示すような様々なまちづくりが鉾山の手によって行われたが、これらの建設はすべて鉾山地域で進められた。中でも特筆すべきは東北初の近代水道の敷設と、寄付行為が同村ばかりではなく周辺町村にも行われていたということであり、このような鉾山事業以外の地元地域への積極的な関わりは同村運営の行政的主導権をも鉾山側に移行させることとなった。また、鉾山地域の社会基盤整備の進捗や鉾山の繁栄によってもたらされた人口の増加、商業地域の発展は、元来農村地域にあった村の中核機能を次々と鉾山地域へ移転させることとなり、同村の行政、経済の中心は鉾山地域となっていった。そして、この状況は「小坂町」となった今日へも受け継がれている。

5. まちづくりの背景

明治時代は富国強兵、殖産興業のスローガンもと、国家規模で産業振興が行われた時代であった。小坂鉾山もその例にもれず企業利潤の追求が最優先されたことは当然であるが、その一方で東北の山中に仮

設的なものではない、当時の最新技術を用いた質の高い社会資本整備が鉾山の手によって行われたことは注目できる。

とくに、第三代所長久原房之助の時代には、藤田組本店は投資株式の暴落により倒産の危機にあり、小坂鉾山の閉山も内定されていた。やがてこの危機は房之助らによる黒鉾新製錬法の開発により回避されるが、この鉾山の存続に関わる重要な時期においても小坂村のまちづくりが続行されたことは「労働力の確保」「事業の一環」という理由だけでは説明できない、まちづくりの理想を考えた人々の姿を教えてくれているものと思われる。

6. おわりに

資料の収集等において協力していただいた秋田県小坂町立博物館郷土館学芸員の亀沢修氏に深く感謝の意を表します。

（主要参考文献）

- (1)「久原房之助」：久原房之助翁伝編纂会(1970)
- (2)「創業百年史」：同和鉾業（株）社史編纂委員会(1985)
- (3)「小坂町史」：小坂町町史編纂委員会(1975)
- (4)「明治工業史 鉾業編」：日本工学会(1930)
- (5)「日本水道史」：日本水道協会(1967)
- (6)「小坂鉾山案内記」：岩間淳一(1909)
- (7)「小坂鉾山鉾業誌」：藤田組小坂鉾山事務所(1905)
- (8)「秋田県の近代化遺産」：秋田県教育委員会(1992)
- (9)「戦後40年の歩み」：同和鉾業（株）小坂鉾業所(1985)